ジェイムス夫人と女の子の物語
――ちりめん本 *The Matsuyama Mirror* と *The Wooden Bowl* にみる顔を隠す美学――

大塚奈奈絵

1. はじめに

長谷川武次郎（1853-1936）が 1885（明治 18）年から刊行をはじめた “Japanese Fairy Tale Series”（「日本昔噺」シリーズ）の 1st series 20 冊には，女の子が主人公の話が 2 編含まれている。同シリーズの no. 10 *The Matsuyama Mirror*（『松山鏡』）と no. 16 *The Wooden Bowl*（『鉢かづき[1]』）で，ともにジェイムス夫人（Mrs. T. H. James または Kate James, 1845-1928）による翻訳作品である。本稿では，『松山鏡』と『鉢かづき』の原作とされる作品と比較し，ジェイムス夫人の翻案の特徴を述べる。さらに，これら二つの物語に共通する自らの美貌にとらわれない姿勢という特徴についても論じる。

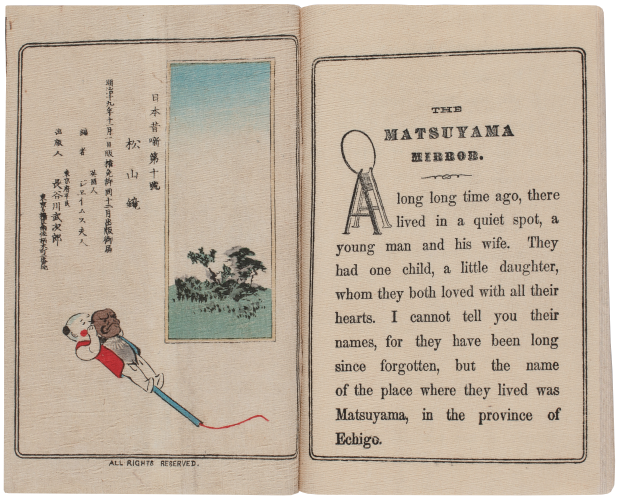
また，一般には，「日本昔噺」シリーズの前半の作品は，いわゆる五大昔話の他に，当時流布していた昔話などでこれを選んだのは出版者としての長谷川武次郎の意向であり，それ以外の神話などを取り入れたのは，バジル・ホール・チェンバレン（Basil Hall Chamberlain, 1850-1935）の意向だったのではないかという推測がなされ，御伽草子系の物語が少ないことも指摘されている。女の子が主人公の昔話は，江戸時代以前から「うりこ姫」などをはじめとして多数存在し，「日本昔噺」シリーズの出版当時にはすでに翻訳されていた作品もみられた中で，やさしい心や努力の意義を女の子に伝える物語として『松山鏡』と『鉢かづき』の 2 編が選ばれた可能性についても検討する。

2. *The Matsuyama Mirror*（『松山鏡』）

The Matsuyama Mirror（日本語タイトル『松山鏡』）は，弘文社から「日本昔噺」シリーズの no. 10 として 1886（明治 19）年に出版された。表紙を含む全 11 丁，挿絵は小林永濯によるもので，平紙本とやや小型のちりめん本がある。神奈川大学図書館では，1886（明治 19）年 12 月出版のちりめん本を所蔵している。

あらすじは以下である。

①昔，越後の松山に夫婦が幼い娘と住んでいた。ある時，夫が仕事で京に行くことになり，妻は誰も行ったことのない都に行く夫を誇らしく思いながら送り出した。
②帰郷した夫は土産として妻に鏡を与え，自分の姿が映ることを教える。鏡に夢中になった妻は，数日後，自分のうぬぼれに気づき，鏡を貴重な品としてしまい込む。
③娘は妻に似て美しく育ち，母と同様に自分の美しさも姿を写す鏡のことも知らずに育つ。ある時，病気で死期を悟った母は娘に鏡を渡し，自分の死後，朝晩鏡の中の母を見るようにと言い残



「神奈川大学図書館所蔵資料（表紙・奥付）」

して，息をひきとる。

④母の死後娘は母の言いつけを守り，娘は毎日鏡に語りかける。いぶかしく思った父が理由を聞くと，娘は母と話していることを説明する。

⑤娘の純真さに感動し，不憫に思った父は，娘に鏡のことを話すことができなかった。

ちりめん本『松山鏡』の原作とされる鏡の物語は，古代インドの民間説話にはじまり，中国や韓国を経て日本に伝わって各地の昔話となり，それに基づいて中世の『鏡男絵巻』や狂言『鏡男』，謡曲『松山鏡』などが創作されたと言われている(2)。「松山鏡」の諸作品を分析した中村とも子は「鏡知らず」の物語のうち「母娘をめぐる「松山鏡」は世界の類話と照らすと日本のみに見られ」るとしている(3)。箱崎昌子は，ちりめん本『松山鏡』を，『神道集』巻第八の四十四「鏡宮事」，『鏡男絵巻』（『鏡破翁絵詞』），室町時代後期の狂言『鏡男』の複数の台本ならびに謡曲『松山鏡』と内容を比較し，「父親の上京，土産の鏡，鏡に映る姿の誤解等，「松山鏡」説話と共通する」とした上で，「母子の情愛が描かれており，母そっくりに娘が成長すること，娘が亡き母を慕い続けていること，父が娘を不憫に思うこと」という三つの主要な物語要素が謡曲『松山鏡』と共通していることを指摘して，ちりめん本『松山鏡』は「謡曲『松山鏡』の物語要素を用いた家族愛の物語として語られている」としている(4)。

ただし，謡曲『松山鏡』では，夫は再婚しており，鏡に話しかける娘が継母を呪っているのではないかと誤解するが，娘が鏡を知らないことに気付いて，鏡にはその前にあるものが写ることを説明する。加えて，父の退場後，母の亡霊が現われ，追ってきた倶生神（鬼）が娘の孝行心によって退治されるという筋立てになっている点が，ちりめん本『松山鏡』との大きな相違点である。前妻に鏡を土産として与えたことは，父の思い出として語られ，ジェイムス夫人版の『松山鏡』にある旅立ちや帰郷時の夫妻の仲むつまじさや夫の好む色の衣装を着るなどの細かい描写はない。また，妻が鏡を見てはじめて自分の美しさに気付いたこと，娘にはうぬぼれの気持ちを持たせないために鏡を隠していたという記述や不憫に思った父が娘に鏡のことを話すことができなかったという記述もみられない。

一方，筆者は，拙稿(5)で，ジェイムス夫人は，日本語の会話はできたが，読み書きのできる範囲は限られたため，“Japanese Fairy Tale Series”（「日本昔噺」シリーズ）に収録された作品は各国語に翻訳された昔話集などから再話したものと考えられるとして，ちりめん本に先行する欧文の昔噺集をあげ，

『松山鏡』については，ヨンケル・フォン・ランゲッグ（Junker von Langegg, F. A.（1828–19?））が翻訳・編纂した *Fu-sô châ-wa*[6]に類似した内容の Das Mädchen aus Echigo（日本語タイトル「越後の少女」）が収録されていることを紹介した。

「越後の少女」では，越後の親孝行な少女が，母の死に際に鏡を渡され，鏡の中に母の優しい顔をみて思いを寄せる。父に鏡のことを知らされても，母の言いつけを忘れず，最後までよく父の世話をしたという孝行話である。短い物語であるが，箱崎が指摘している「母子の情愛が描かれており，母そっくりに娘が成長すること，娘が亡き母を慕い続けていること，父が娘を不憫に思うこと」という三つの主要な物語要素は共通している。あらすじは謡曲『松山鏡』よりもジェイムス夫人版の『松山鏡』に類似しているが，謡曲『松山鏡』と同様に夫が旅立つ際の様子や，妻が土産にもらった鏡をしまい込んだことなどについての記述はない。さらに，父が鏡について説明し，それを聞いた娘は悲しむが，やがて以下のように考える。

> “Auch wenn es meiner Mutter Selbst nicht ist, das ich hier schaue, so ist es ein Bild, das ihr gleicht, und das ihr lieb gewesen. Daher will ich fürder wie bislang es kindlichen Sinnes verehren, und es zum Zeugen machen, dass ich ihres letzten Gebotes gedenke.”（*Fu-sô châ-wa*, 236）
>
> 私が見ているのがお母さん自身でないとしても，お母さんと同じ顔をしたお母さんが愛した者の像です。だからこれからも，これまでもと同じように子供としてこれを慕い，私がお母さんの最後の言いつけを忘れていない証としましょう。（奥沢康正訳[7]）

これらを比較すると，夫の旅立ちや帰郷の際の妻の情愛に満ちた心遣いの描写や，自身の美貌をうぬぼれることへの戒め，自身の像を母と思い込む娘を不憫に思う父親が娘にそれを告げられなかったことが，ジェイムス夫人版の『松山鏡』の翻案の特徴であることが分かる。また，中村とも子は，「越後の少女」とちりめん本『松山鏡』を比較し「鏡をめぐる母娘の最後の会話と母亡きあとの娘の心情表現が似通うと指摘している[8]。

なお，ジェイムス夫人と親しく，同様にちりめん本「日本昔噺」シリーズの翻訳者であったチェンバレンは謡曲に親しみ，翻訳もしている。ジェイムス夫人の『松山鏡』が出版された 1886 年にチェンバレンが出版した教科書 *A romanized Japanese reader*[9]の 38 節には，ローマ字による『松山鏡』（vol. 1 p. 45）と英訳（vol. 2 p. 56）が掲載されている。「越後の少女」に似た筋立ての短い物語で，箱崎が指摘した「母子の情愛が描かれており，母そっくりに娘が成長すること，娘が亡き母を慕い続けていること，父が娘を不憫に思うこと」は共通していることから，ジェイムス夫人が何らかの形で出版前のチェンバレンの教科書を読んだか，あるいは同じ作品をもとに再話したという可能性はあると思われる。ただし，チェンバレンの「松山鏡」も「越後の少女」と同様に，夫の旅立ちや帰郷の際の妻の心遣いの描写や，自身の美貌をうぬぼれることへの戒めはなく，また，結びの部分は「その父あやしと思ひて，その故を問ふに，娘しかじかの由を答へければ，父も「いと不憫なることなり」と涙にくれしとぞ。」（平川祐弘によるローマ字からの日本語への書き換え[10]）とあり，父が謡曲『松山鏡』や「越後の少女」と同様に，娘を不憫に思い涙する場面で終わっている点がジェイムス夫人版の『松山鏡』と異なっているといえる。

さらに，日本の民話などでは夫婦の情愛が描かれることは多くはないが，ジェイムス夫人版の『松山鏡』では，夫の上京を心配しながらも，片田舎から京へのぼる初めての人である夫を妻が誇りに思っていること，帰郷の日に娘には一番の晴れ着を着せ，自分は夫の好む色の着物を着て出迎えたことなどが書かれている。箱崎昌子が，夫の好む青の着物について，西洋で「礼節，誠実な愛」を示す色を意図的に用いていると指摘しているように，ここで描かれる妻は，一般的に日本の民話に現われる女性より

も，夫への愛情を率直に表現している点で西洋の物語に出てくる婦人像に近い。こうした「工夫」を平川は「いかにも英国海軍将校の夫人らしい脚色[11]」と指摘しているが，測量術の教師として日本海軍の遠洋航海に同行する夫を送り出し，異国で一人夫の帰りを待ちわびたジェイムス夫人自身の経験が反映されていると考えられる。

さらに，上京と帰郷の際の夫の言動については，謡曲『松山鏡』や「越後の少女」では過去の出来事として詳しくは語られていないが，ジェイムス夫人の『松山鏡』では，“He had much to tell of all the wonderful things he had seen upon the journey, and in the town itself”, “… proud of knowing something that his wife didn't know” などの心理が説明されて，夫婦の会話の様子が詳しく描かれ，妻に美しい工芸品の鏡を土産とし，妻の美しさを愛する優しい夫としての描写がされている。

また，この物語では，一般的な昔話の「めでたし，めでたし」や松山鏡説話に見られる騒動の終息や「落ち」ではなく，父が娘に本当のことを告げることができないという，余韻を持った以下のような文章で終わっている。Nor could he find it in his heart to tell the child, that the image she saw in the mirror, was but the reflection of her own sweet face, by constant sympathy and association, becoming more and more like her dead mother's day by day.

この最後の文章では，父は，鏡の中の自分の像を母の姿だと信じ込んでいる娘を憐れむと同時に，娘の中に面影が見える亡き妻への哀惜をこめて涙を流したことに，夫の妻への愛情が感じられる。この点が，前妻の亡き後程なくして再婚した謡曲『松山鏡』の夫との大きな違いであり，ちりめん本『松山鏡』の最大の特徴となっていると思われる。

ジェイムス夫人のちりめん本出版以前には，児童向けの物語として扱われることの少なかった『松山鏡』は，その後，巌谷小波が編纂した和英対訳本[12]や尾崎テオドラの英訳[13]のおとぎ話集にも再話されたが，これらは，謡曲『松山鏡』と同じ筋立てで，話の筋が少々複雑で冗長に感じられる。一方，ジェイムス夫人版の『松山鏡』は，長女のグレイス・ジェイムス（James, Grace, 1882–1965）が 1910 年に刊行した *Green willow and Other Japanese Fairy Tales*[14]にそのまま収録された。第二次世界大戦後は日本国内では児童書として『松山鏡』が出版されることは少なくなっている一方で，欧米においては，1992 年に出版された Angela Carter 編 *The Second Virago Book of Fairy Tales*[15]などに，比較的最近まで繰り返し再話され，出版されている。

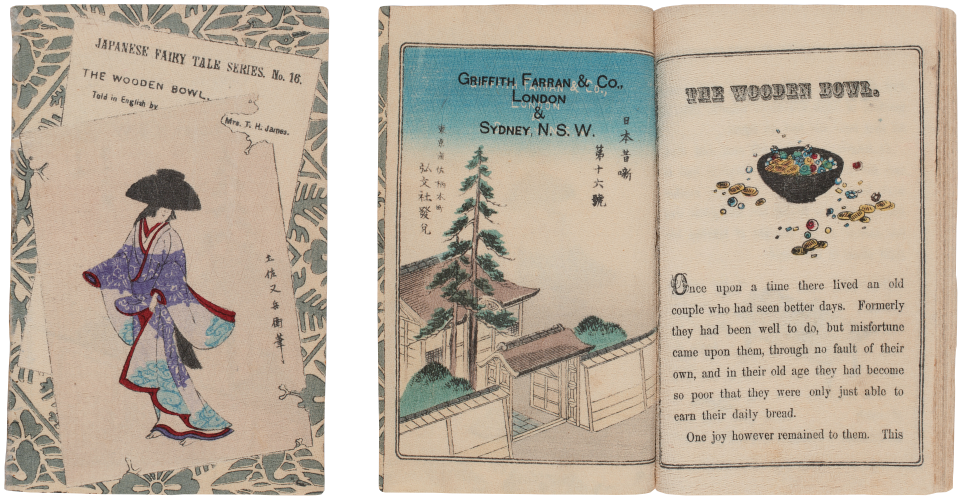
3. *The Wooden Bowl*（『鉢かづき』）

The Wooden Bowl（日本語タイトル『鉢かづき』）は，弘文社から「日本昔噺」シリーズの no. 16 として 1887（明治 20）年に出版された。表紙を含む全 14 丁，表紙絵には「土佐又兵衛筆」とあるがこれは絵模様であり，挿絵の絵師は不明で，平紙本とやや小型のちりめん本がある。「日本昔噺」シリーズの no. 16 は，1896（明治 29）年 6 月にジェイムス夫人訳，新井芳宗の挿絵の *The Wonderful Tea-Kettle* に差し替えられた。その後，*The Wooden Bowl* は，1934（昭和 9）年 5 月に鈴木華邨による挿絵で，シリーズナンバーのないやや大型のちりめん本として刊行された。この大型のちりめん本については後述する。

神奈川大学図書館では，1887（明治 20）年 11 月出版，Griffith Farran & Co., London & Sydney, N. S. W. から販売されたちりめん本を所蔵している。

あらすじは以下である。

①昔々あるところに，以前は裕福であったが，不運によって零落した夫婦がいた。夫婦には目のくらむように美しい一人娘があり，二人は娘を大切に育てていた。やがて父が亡くなり，衰えを感



「神奈川大学図書館所蔵資料（表紙・奥付）」

じた母は，娘がその美しさによって不幸になるのではないかと心配し，臨終の枕元に娘を呼んで，美しさを隠すために娘の頭に木鉢をかぶせ，取らないようにと戒めて，亡くなった。

②母親が亡くなると，娘は鉢をかぶっていることを周囲にあざけられながらも，田畑で一生懸命働き続けた。そのうちに娘の静かで上品なふるまいと働きぶりが地主の目にとまり，娘は地主の屋敷で病弱な地主の妻につかえるようになった。親切な地主夫妻は娘を実の子供のように扱った。

③ある時，都で学んでいた地主の長男が帰郷し，木鉢をかぶる娘に興味を持った。娘の悲しい生い立ちを知り，木鉢の下をこっそりのぞいた長男は娘に恋をして，妻にしたいとのぞみ，相応しくないと反対する家族や親戚を説得した。

④恩ある地主の家族達の諍いに配慮して，一度は愛する長男の結婚の申込を断った娘であったが，夢の中に亡き母が現われて，自分の願いに従うようにと言ったことから，結婚の申込を受入れた。婚礼の準備がはじまり，皆が鉢を取ろうとしても娘は痛がって取ることはできなかった。

⑤婚礼がはじまり，花嫁が「三三九度」の杯に唇をつけると，木鉢は大きな音とともに割れ，中からたくさんの宝石や金銀が床に広がった。宝物にも増して，人々を驚かせたのは花嫁の美しさであり，かつてなかった程喜ばしい婚礼となった。

鉢を頭にかぶせられた「鉢かづき姫」の話は，『御伽草子』をはじめとして，奈良絵本を絵巻に仕立てた『三草紙絵巻』の「はちかづき」，江戸時代の木版挿絵本の「赤本」なども現存し，古くからの民間伝承として様々な類話が伝わっている。これらのうち，一般に広く知られた鉢かづき姫の物語は，長谷観音の霊験譚，あるいは継子いじめの話として知られ，ジェイムス夫人版の『鉢かづき』とは少々異なっている。

『三草紙絵巻』「はちかづき」(16)のあらすじは以下である。

①備中守さねたかは長谷観音に詣でて一人娘の幸福を祈っていたが，妻は死に際に姫の頭に手箱を載せ，その上から鉢をかぶせた。

②父の後妻は姫を憎み，父は姫を野中に捨てさせた。身投げを試みた鉢かづきは助けられ，三位中将の屋敷で湯殿の火焚きとして雇われる。

③中将の末息子の宰相が鉢かづきを見初めてわりない仲となり，夫婦になる約束をして，つげの枕と横笛を与える。
④宰相の母は鉢かづきを追い出そうとするが，宰相が言うことを聞かないため，妻の嫁合わせを行なって恥をかかせようとする。
⑤嫁合わせの日，二人が家を出ていこうとすると鉢が取れて美しい姫君が現われ，鉢の中の手箱には高価な衣装や金銀の宝が入っていた。美しいばかりではなく，楽器の演奏や和歌や習字などにも秀でた鉢かづきに三位中将は感心し，鉢かづきと宰相に財産を譲ることにする。
⑥後妻との仲がうまくいかなくなり，娘に会わせて欲しいと長谷観音に願っていた父親は，参詣した鉢かづきに再会する。

ここでは，長谷観音に娘の幸せを願いながらも再婚し，継母の願いを入れて娘を捨てた父親が，最後は，長谷観音の霊験により娘に再会するという筋立てになっていて，昔話としては，継子いじめの「シンデレラ」の系統の話と考えられている。和歌や楽器の演奏に秀でた主人公の姫君は，父に捨てられて身投げをし，宰相との恋でも行く末をはかなんで思い悩んで死を考えてしまう。父母亡き後も田畑に出てかいがいしく働き，勤勉と有能さで地主に気に入られる，ジェイムス夫人が描く『鉢かづき』とは人物造形が全く異なっている。

一方，拙稿[17]で紹介したとおり，デビット・オーガスト・ブラウンズ（David August Brauns（1827–1893））が 1885 年に出版した *Japanische märchen und sagen* には Das Mädchen mit dem Holznapfe（「木の椀をつけた少女」）[18]が収録されており，その内容はちりめん本『鉢かづき』とほぼ同様である。ここでは，長谷観音の霊験はなく，継子いじめもない。「昔，昔」ではじまり，主人公が不運により貧しくなった夫婦の娘であり，娘の美しさを気遣った母が死の間際に頭に鉢をかぶせたこと，勤勉さを認められて地主の屋敷で働くようになり，都から帰った長男に見初められたこと，結婚に反対する家族，親族を息子が説得し，一度は息子の求婚を断った少女も，夢に現われた母の言葉に従って結婚することになること，婚姻のワインを飲み干した瞬間に鉢がわれて，少女の美しさが表れ，宝物が転がりでることなど，あら筋がほぼ共通している。石澤小枝子はジェイムス夫人の訳を「複雑で長い継子譚を昔噺風に省略して短くしている」[19]と述べているが，この昔話風の省略は，ブラウンズによる再話，あるいはその元となった説話によるものと考えられる。

一方，ブラウンズの「木の椀をつけた少女」の簡潔な記述と比較すると，ちりめん本『鉢かづき』では，登場人物の心理が推測できるようなこまやかな描写が加えられている。例えば，以下のように地主とその妻に可愛がられ，心を込めて看護する場面は「木の椀をつけた少女」には見られない。Now the poor orphan had a happy home once more, for both the farmer and his wife were very kind to her. As they had no daughter of their own, she became more like the child of the house than a hired servant. And indeed, no child could have made a gentler or more tender nurse to a sick mother, than did this little maid to her mistress.

また，息子が少女に結婚を申込み，家族が反対する場面でも，“Her mistress even, who had been so good to her, now seemed to turn against her, and she had no friend left expect her master, who would really have been pleased to welcome her as his daughter, but did not dare to say as much” のように，家族の複雑な思いや鉢かづきの心理が読者に伝わる文章が挿入されている。

同時に，困難に立ち向かう少女を “but she had a brave heart” のように分かりやすい言葉を使い，少女を励まし，賞賛する筆致がみられる。さらに，割れた鉢から出てくる “viele seltene Edelsteine und andere Kostbarkeiten”（たくさんの珍しい宝石とその他の貴重な品々）を “a shower of precious stones, pearls, and diamonds, rubies, and emeralds, which had been hidden beneath it, besides gold and silver in

abundance” と訳すなど，生き生きと具体的な記述もジェイムス夫人の翻案の特徴と言うことができる。

4.『松山鏡』と『鉢かづき』の共通の主題――顔（美）を隠すこと

ここまで，ジェイムス夫人が翻訳した『松山鏡』と『鉢かつぎ』について，原文と考えられる作品と比較し，その翻訳・翻案の特徴を見てきたわけであるが，この 2 つの作品に共通するテーマとして，女性の美しさを隠す，あるいはうぬぼれを戒めるという母の教えと，それを忠実に守る娘が描かれてことに気付く。『松山鏡』では，自分の美しさに気付いてうぬぼれの気持ちを持ったことを心に留めていた母親は，娘に虚栄心が芽生えることを恐れて鏡を注意深く隠す。（Mindful of her own little passing vanity on finding herself so lovely, the mother kept the mirror carefully hidden away, fearing that the use of it might breed a spirit of pride in her little girl.）他の『松山鏡』の説話等では，娘は鏡の像は自分の姿であることを教えられるが，ジェイムス夫人版『松山鏡』では教えられることはない。

『鉢かつぎ』では，母は娘に，その美しさが身の破滅を招く危険な贈り物であると教え，すべての男性の目からできるだけ隠すようにと命じて，鉢をかぶせる。（She told her that her beauty was a perilous gift which become her ruin, and commanded her to hide it, as much as possible, from the sight of all men.）母の愛を理解し，二人の娘はどちらも素直に教えに従う，気立てのよい，よく働く女性に成長するのであるが，この二つの作品で描かれる母と娘は，日本の昔噺や御伽草子に見られる女性像というよりも，むしろ，欧米的な自我を持つ倫理的な女性であり，原作となる日本の昔話や説話の人物像とも異なっている。特に『鉢かづき』では，主人公は，勤勉でやさしく，母の言いつけを守って身持ちも堅い女性で，「三三九度」の杯で結婚が成立して初めて鉢が割れるなど，禁欲，貞淑というモラルや価値観を感じさせる内容となっている。

平川祐弘は，ラフカディオ・ハーン（Lafcadio Hearn, 小泉八雲，1850–1904）による「松山鏡」とジェイムス夫人訳の『松山鏡』を比較し，「娘のナルシシズムへの危惧などという近代的でさかしらな倫理感覚」，「ヴィクトリア朝英国の女性らしい，倫理的な小細工があった」が，ハーンはそれを取り除いて自然体に引き戻したとしている[20]。実際，牧師の娘であったジェイムス夫人は，勤勉を好む，倫理観の高い女性であった。夫人には二人の娘がいたが，長女グレイスが後年，幼い頃の思い出を綴った著書の中で，次のような逸話を紹介している。

> Once I said to my mother in an very conceited way, “The Japanese think I am very pretty.”
> “Oh,” returned my mother, drily, “I cannot image how they think that.”
> “They do -they say Kiré, Kiré.”
> “I expect you seem very odd and funny to them because you are pale and yellow hair and their children are black-haired and blown-faced. They are too polite to say you are funny—that is all.”
> I believe my mother was right.[21]

この図書に掲載された写真では，9 才のグレイスは，金髪で目鼻立ちの整ったかわいい少女である。おそらく，ジェイムス夫人は，日本人にちやほやされて，娘が自分の美しさにうぬぼれを持つことを恐れたのではないかと思われるが，幼い女の子にとっては少々厳しいしつけであったかもしれない。

また，グレイスは，子ども達が通い始めた幼稚園が「遊び」を教えるところだと聞いたジェイムス夫人が，スコットランド人的な考え方で「遊ぶ」は「学ぶ」ではないとして幼稚園を辞めさせ，フランス語を習わせることに決めたというトピックを紹介し，ここでも “She was quite right” と述べて，自分は学校でも私生活でもフランス語に苦労することは全くなかったと説明し，さらに以下のように述べてい

る。She used to say to us, “You must make an effort, my dears. You will never learn anything worth while without making and effort. Make the effort. It’s worth it.”[22]

では，ジェイムス夫人が女性の美しさに価値をおかなかったのかと考えるとそうではない。『鉢かづき』の最後の文章では，“But, what astonished the wedding guests more even than this vast treasure, was the wonderful beauty of the bride” とあり，宝物よりも花嫁の美しさに驚いたとなっている。そして，花婿もそのことを誇りに思うのであって，ジェイムス夫人は決して女性の美の価値を否定しているわけではない。むしろ，貧しく孤独な少女の場合は美貌が災いの種になる場合があること，そして自らの美貌への自惚れが，努力や勤勉を続ける妨げになる場合があることを伝えたかったのだと思われる。

グレイスが語る，誰もに細やかな心遣いを示し，娘を慈しみ，美貌よりも “pure, and good, and true” と説く母親像と，子供の頃，夜通し病気の牛の世話をしたという経験をチェンバレンに話したという逸話などを考え合わせると，ジェイムス夫人自身がおそらくは勤勉と努力の人であったと考えられる。ケイト・ジェイムスは，教養はあるが豊かではない聖職者の娘として育ち，成人後は異国で家庭教師として働いた後，チェンバレンによれば「文無し」の貧しい海軍中尉と結婚した。海軍のミッションで夫が日本に赴任することになり，配偶者の旅費の支給がなかったために借金をして夫とともに来日したという。つましく生活しながら，華族の子弟に英語を教え，ベットの下に置いた箱に金を貯めて夫を支え，やがて 3 人の子供にも恵まれ，徐々に豊かな生活を送るようになった。自分の美しさに重きを置かないこと，幸せは勤勉と誠実，そして自らの努力によって手に入れるものであるという価値観は，ジェイムス夫人自らの経験に基づく考えであり，夫人の生き方，そのものであったと考えられる。

こうしたことを考え合わせると，ちりめん本「日本昔噺」シリーズの翻訳をすることになった時に，『古事記』の諸作はチェンバレンの意向をくんで，さらにチェンバレンも翻訳していた『松山鏡』を取り上げて，夫人自身の価値観に沿って翻案したものと考えられる。そしておそらくは，『鉢かづき』を少女達に向けて選び，翻訳・翻案したのであろう。

5. おわりに

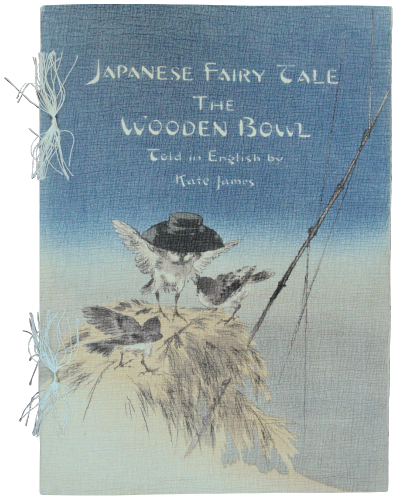
前述したように，「日本昔噺」シリーズの no. 16 の『鉢かづき』は，9 年後の 1896（明治 29）年にジェイムス夫人訳の『文福茶釜』に差し替えられた。この差替は，研究者にも謎とされ，アン・ヘリングは江戸時代には人気のある読み物のひとつであった「鉢かづき」は，「若い男女が本人同士の愛情と自由選択に従って結婚するという物語の結末は，児童の読み物として危険な者と見られ，明治以降からは，多少敬遠されることになったのであろうか」[23]と述べている。

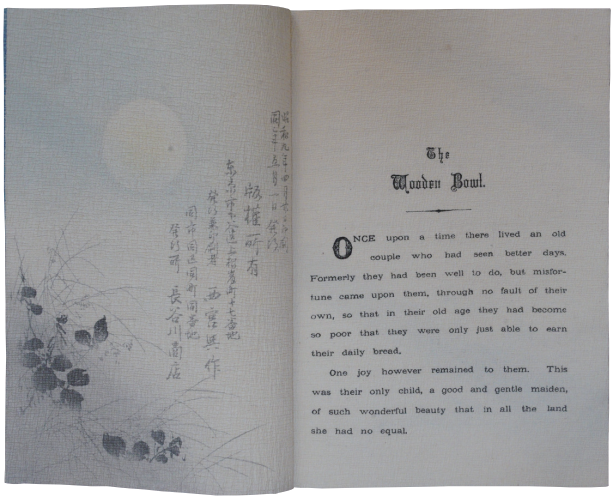
一方，『鉢かづき』は，1934（昭和 9）年 5 月に鈴木華邨（1860–1919）による挿絵のやや大型のちりめん本として，長谷川武次郎の息子である西宮與作により長谷川商会から出版された。華邨による表紙の絵には，杯をかぶった雀が描かれて，一見して『鉢かづき』であることは分かり難いが，ページを繰ると，小型本に負けない美しい世界が展開する。

文章は 15% 程度短くなり，長男の求婚を退ける鉢かづきに対するいじめのエピソードが書き換えられているものの，内容はほぼ 1887 年版を引き継いでいる。“brave heart” を持つジェイムス夫人版「鉢かづき」の復活である。1887 年版からの文章の削除部分は前半に集中しており，「田畑で働く鉢かづき」のページのように，華邨の挿絵の美しさを生かした字配りとするために文章を削除したことがうかがわれる。

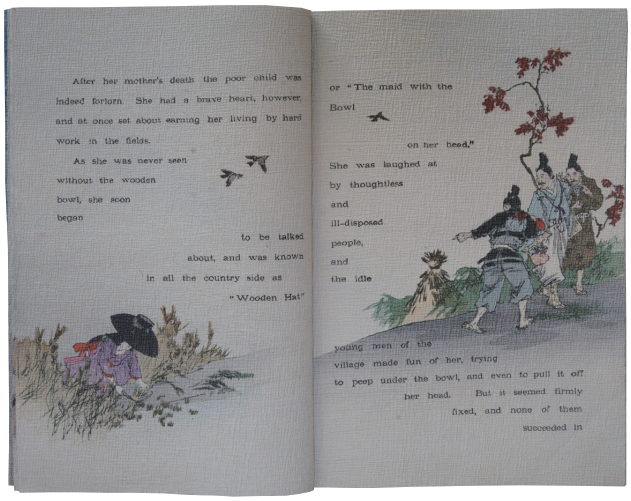
なお，この大型本の巻末の広告には，以下のような記載がある。

JAPANESE FAIRYTALES. LARGE SIZE EDITION.





「著者所蔵資料 1934 年版（表紙・奥付）」



「著者所蔵資料 1934 年版：田畑で働く鉢かづき」

Told in English by Mrs. T. H. James.
Momotaro or Little Peachling.
Three Reflections.
The Flowers of Remembrance and Forgetfulness.
The Wooden Bowl

これによれば，長谷川商会がこれら 4 冊の大型ちりめん本を「ジェイムス夫人訳の大型本」として販売する意向であったことを推察することができる。長谷川は，小泉八雲の大型ちりめん本 5 冊を紺色の布製の帙入で販売していたが，西宮家には，大型ちりめん本 4 冊を入れる橙色の帙も残されていて，ジェイムス夫人の 4 冊はこれに入れて販売されたのではないかと想像される[24]。

実は，この大型ちりめん本が出版された 1934 年に先立つ 1928 年に，ジェイムス夫人は英国でその生

涯を閉じていた。挿絵を描いた鈴木華邨も 1919 年に没しており，この大型本は出版よりもかなり前の時点で準備されたが，何らかの事情で出版できないままになっていたものであったのかもしれない。『文福茶釜』が出版される前年の 1895（明治 28）年に，ジェイムス夫妻は夫の勤務先の日本郵船ロンドン支社開設準備のために帰国することになった。この帰国が予期しないものであったことは，長女グレイスの追憶からも読み取ることができる。夫人の帰国後に出版された『文福茶釜』『思い出草と忘れ草』『不思議の小槌』『壊れた像』は，おそらく夫人の帰国以前に出版の準備がなされていたものであろう。

一方，ジェイムス夫人訳の大型ちりめん本 *Momotaro or Little Peachling* が刊行された 1932 年には，ジェイムス夫人の長男のアーサー・ジェイムス（Ernest Arthur Henry James, 1883–1944）が東京の英国大使館付きの武官として来日しており，1934 年には，長女グレイスもアーサーを訪ねて来日している。憶測の範囲であるが，遺族との了解が成立して，準備していた大型ちりめん本がようやく出版されたのではないだろうか。ただし，この頃には日英関係は冷え込み，ジェイムス夫人の 4 冊本もかつてのように欧米に歓迎されることはなかった。

謝辞

本研究をまとめるに当たり，村井まや子先生から多数の有益なコメントをいただきました。また，西宮版画店の西宮多美子様から貴重な資料をご提供いただき，片山純一様に撮影していただきました。ここに記して深謝いたします。

〈参考文献〉

石澤小枝子『ちりめん本のすべて：明治の欧文挿絵本』三弥井書店 2004。

佐成謙太郎著『謡曲大観』第五巻，明治書院，昭和 6．国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/1884343（参照 2023–10–17）

〈注〉

（1）ちりめん本には日本語書名がないが，1889 年に弘文社が出版した『日本昔噺』第十三から第十八號の合冊本（平紙本）には，日本語書名「鉢かつき」とある。明治時代のかな表記では濁点が使われなかったため，本稿では一連の物語の書名として一般的な「鉢かづき」を使用する。

（2）興津要編『古典落語』（選）（講談社学術文庫）講談社 2015 p. 34。

（3）中村とも子「母娘をめぐる「松山鏡」：再話作品と昔話」『昔話伝説研究』（36）2017. 3 pp. 37–63。

（4）箱崎昌子「ちりめん本「日本昔噺」シリーズ “THE MATSUYAMA MIRROR.”（『松山鏡』）考 —— 鏡をめぐる騒動から家族愛の物語へ」『いわき明星大学大学院人文学研究科紀要』（7）2009. 03 pp. 13–20。

（5）大塚奈奈絵「ジェイムス夫人訳 *The Cub's Triumph* とグリフィス訳 “The fox and the badger” —— 狐・猫・狸が化ける国「日本」 ——」神奈川大学人文学研究所報（69）2023. 3 p. 119–129。

（6）Junker von Langegg, F. A. *Japanische Thee-geschichten: Fu-sô châ-wa. Volks- und geschichtliche Sagen, Legenden und Märchen der Japanen*. C. Gerold's Sohn, 1884 pp. 233–236. https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=coo.31924023513561&seq=269（参照 2023–11–14）.

（7）奥沢康正訳『外国人のみたお伽ばなし —— 今日のお雇い医師ヨンケルの『扶桑茶話』』思文閣出版 1993 p. 175。

（8）中村 2017。

（9）Basil Hall Chamberlain. *A romanized Japanese reader;: consisting of Japanese anecdotes, maxims, etc., in easy written style, with an English translation and notes pt. 1–3*. Kelly & Walsh, 1886 3v.

（10）平川祐弘『小泉八雲と神々の世界　ラフカディオ・ハーン —— 植民地化・キリスト教化・文明開化』（平川祐弘決定版著作集第 12 巻）勉誠出版 2018 pp. 514–515。

（11）同上 p. 516。

（12）巌谷小波編『日本昔噺：校訂』第四編，英学新報社，明 36–37。国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/1168706（参照 2023–11–14）

（13）Compiled by Yei Theodora Ozaki. *Japanese fairy tales*. 2003［eBook #4018］. The Project Gutenberg https://www.gutenberg.org/cache/epub/4018/pg4018-images.html（参照 2023-11-14）.
（14）Grace James. *Green willow and other Japanese fairy tales*. Macmillan, 1910. pp. 228-233.
（15）Carter, Angela, ed. *The Second Virago Book of Fairy Tales*. London：Virago, 1992.
（16）石井正己『ビジュアル版日本の昔話百科』河出書房新社 2016 pp. 16-20。
（17）大塚奈奈絵 2023。
（18）David Brauns. *Japanische märchen und sagen, gesammelt und hrsg*. Leipzig：W. Friedrich, 1885. pp. 74-78.
（19）石澤小枝子『ちりめん本のすべて：明治の欧文挿絵本』三弥井書店 2004 p. 48。
（20）平川祐弘 2018 p. 521, 525。
（21）James, Grace, *John and Mary's Aunt*, London, Frederick Muller, 1950. p. 35.
（22）ibid. p. 182.
（23）アン・ヘリング「国際出版の曙 ── 明治の欧文草双紙」福生市郷土資料室編『特別企画展　ちりめん本と草双紙』福生市教育委員会 1990 p. 35 https://www.lib.fussa.tokyo.jp/digital/digital_data/literature/pdf/0608/0001/0006.pdf（参照 2023-11-14）。
（24）*Catologue of Japanese Colour Prints, Illustrated Books etc.. Hasegawa publishing*.［刊行年不明］p. 2 には，同様にジェイムス夫人の Japanese Fairy Tale Series Large Sise Edition として，*Momotaro or Little Peachling* と *The Wooden Bowl*（各定価 $ 1.25）が記載されているが，管見の限りでは，それぞれ，1932 年と 1934 年以前の刊行のものは確認できていない。また，*The Tongue-Cut Sparrow*（*in the press*）の記載もあるが，この刊行は確認できていない。